

令和5年度 住民向け研修会

障がい者も住みやすいまちづくり
～ “地域で共に暮らす”を実現するために～

竜王地区

当日の記録

令和5年10月24日（火）14時00分～15時50分

甲斐市役所北部公民館 ホール

社会福祉法人 甲斐市社会福祉協議会

甲斐市障がい者基幹相談支援センター

○開催目的

—昨年度より、地域の身近なところで、障がいをお持ちの方がいらっしゃること、障がいをお持ちのご本人・ご家族へ地域で取り組んでいる活動を知っていただくことを目的とし、「障がいについて」学び、「地域で取り組みそうなこと」を考える機会を作りました。甲斐市で行っているささえ合い協議体の方に声をお掛けし、少人数で話し合いの出来る規模で研修を行っています。今回は竜王地区を対象に開催しました。

○当日スケジュール

14:00 開会

(司会：基幹相談支援センター 鴨作光昭)
センター長挨拶
(基幹相談支援センター長 三澤宏)



14:05 講演 ①

「ささえ合い活動の紹介」

説明者：甲斐市社会福祉協議会 地域サポート係 河西恵美子氏

講演 ②

「地域で共に暮らすを実現するために」

講師：山梨県立大学 人間福祉学部 福祉コミュニティ学科 准教授 高木寛之氏

14:20 当事者の発表

- 宿澤理恵さん
- 白濱顕子さん
- 片桐純也さん

15:00 『話し合ってみましょう』

4Gに分かれて、講演・当事者の発表を聞いての感想や、当事者の方に確認したいこと、支えあいの活動として今後何ができそうか？などについて話し合いを行いました。

15:25 発表・講評

各Gより話し合った内容のポイントを発表していただき、その内容を受けて高木先生よりまとめのお話をさせていただきました。

15:45 閉会

○内容

・講演①「ささえ合い活動の紹介」

説明者：甲斐市社会福祉協議会地域サポート係 係長 河西恵美子氏

当事者の方の参加もあったことから、改めてささえ合いの活動について資料を使い、説明を受けました。

今回の対象地区である、竜王地区のささえ合いの活動についても、活動の様子が写真で紹介されました。



・講演②「地域で共に暮らすを実現するために」お話ししたい3つのコト

講師：山梨県立大学 人間福祉学部 福祉コミュニティ学科 准教授 高木寛之氏

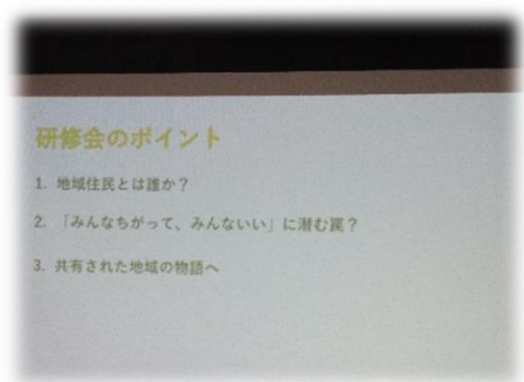
演題に沿って、①地域住民とは誰か？②「みんなちがって、みんないい」に潜む罠？③共有された地域の物語への3つの視点で分かりやすく、講演を進めていただきました。

① では、健常者も含めて、施設で暮らす人も含めて地域住民であることを確認しました。地域で共に暮らす、支え合いの暮らしの実現は何かをすればすぐに実現できるものではなく、まさしく当事者の為に当事者が何かできる地域を、時間をかけて創っていくものです。

② では、「みんなちがって、みんないい」の使い方を間違っていないか？という投げかけがありました。使い方を間違えると「排除」することになってしまいます。あなたはあなた、私は私、もう知りませんよ。となったら大きな間違いです。これは孤立・孤独の原因となります。相手を認めた上で、何が違うのかをよく理解したうえで使う必要があります。そんな罠があるという事も考えてみてください。

③ では当事者ご本人・ご家族と地域が何を共有してそれによって物語をどのように作っていくかを示していただきました。相手のストーリーを理解すると、応援したくなる、関わりたくなります。今若い人達が使う「押し」がまさにそれにあたります。どういう物語を経て、これからどう生きるか。そこを理解し、応援したい、推していきたい。大人だけでなく、子ども達にとっても同じことが言えますね。

高木先生の講演後より、先生には当事者発表、テーブルごとの話し合い、発表・講評までを進行・コーディネーターとして、ご協力をいただきました。



・当事者の発表

① 宿澤さん

自己紹介から始まり、夫と玉川団地に住んでいること、スーパーが近くにあるなどのメリットと、改装工事をしており、家賃が値上がるのではないかと不安もあるという話から入りました。近所同士の関係が浅いことも自分にとっては助かるという話もありました。



子どもの頃は素直で明るかったこと、高校卒業後、テレビ・雑誌の仕事（芸能界に入りたかった）がしくて、劇団に所属した際に、色々な事が重なり、脳が誰かに操られているような感覚に陥り、独語が酷くなってしまったこと。その後、言葉が出なくなり、悪い事ばかり考えていて、ロープと睡眠薬を買い、死ぬ場所を探していたというエピソードの紹介がありました。

家で見た医学書に自分の経験と同じエピソードがあり、それは感情障害・分裂病であることを知り、医療機関と繋がったこと。何度か転院をしたものの、治療とOTが開始され、ピアの繋がりが出来て、とても嬉しかったとのことでした。結婚をされ、統合失調症を持つ夫が、症状によって態度が変わってしまうのが辛いなど、改めて「統合失調症」という病気の大変さも伝えてくれました。今は毎日平凡というような幸せな日々を送っていること、不安な部分もありますが、幸せに感じていることの報告がありました。



最後に、今からの生活において、「人の為」

「自分の為」に生きたいと思う事について話をしてもらいました。「人の為」は、ピアサポの活動をしており、自分の話を聞いた方が、元気になれることの嬉しさを実感していることです。膝を痛めて、足の状態も悪く、緊張しますが、続けていきたいとのことでした。「自分の為」は色々な活動を通して成長したいと思っています。現在、甲斐市の自立支援協議会で地域包括ケア部会に部会員として参加をしており、年間3回ほどの部会と、コアメンバーの会議にも参加し、当事者の視点から意見を述べるなど活動されています。



② 白濱顕子さん

まず、今行っている仕事の話からいただきました。パソコンを使ったり、テープ起こしをしたり、点字を挿入している仕事をされているそうです。パソコンを使う仕事以外にも、ボランティア養成や啓発活動をされています。趣味のお話もいただきました。カラオケにも行くし、ピアノを弾いたり、陸上やスキー何でもされるそうです。

全盲で光を若干感じる程度の視力とのことですが、町づくりや協議会の委員もされていて、その活動の中で意識されていることについては、弱視であっても地域に出て行くのをためらってしまい、ひきこもりになってしまうことが多いとのこと。盲導犬だけでなく、聴導犬など視覚障害のみでなく、外出や生活をサポートしてくれる制度や仕組みがあり、その情報をもっと知って欲しいとお話がありました。



また、人間は情報の取得の80%を目から取り入れていると言われており、視覚障がいの特性として、ご自身が全盲であるため、何でも触ってみたい、見えないものに触れてみたい、感じてみたいという気持ちが強く出てしまうそうです。白杖を持っている人が偏見の目で見られたり、街中でよけて話をされる感覚は目が見えなくてもよくわかります。気配で人が居るのが初めてわかります。目で見ること以外の手段でしか情報が入られないため、地域の皆さんが挨拶や、状況の伝達を、普通にしてほしいと思います。是非、遠くからではなく、無視することなく、近くによって声をかけていただきたいと思います。

③ 片桐純也さん

まず、仕事の話からしていただきました。支援学校卒業後2年間は、障がい福祉サービス事業所を利用されていたそうです。今は、イオンモール甲府昭和にあるGUに勤めて、もうすぐ勤続8年になるそうです。仕事は大変だけど楽しくしているそうです。服を畳んだり、店内清掃をしたり、力仕事もあるそうです。下の階から搬入された荷物を運び入れたり、品出しをして店内に陳列する服全てをハンガーにかけたりしています。会社からは、力仕事もしてくれて、服を畳むのも早いとの評価をされているそうです。篠原の自宅から自転車で15分ほど走って通勤しているそうです。



趣味も多彩でした。著名人の方と写真撮影をするとのこと。また、ヴァンフォーレ甲府の大ファンで、小瀬まで自転車で応援に出かけるそうです。国立競技場にも電車に乗って2回ほど応援に行ったそうです。電車でも出かけることも好きだそうです。仕事をしていて大変なことは、力仕事だそうです。楽しさの方が強いとのことでした。8年間の勤続が本人にとっても自信になっているようです。また、仕事以外で楽



しいことは、サッカー観戦で、家族と一緒に連休に東京ディズニーランドに行ってきたとのことでした。高木先生より、8年間仕事が続けられることの秘訣は、仕事のマッチングや、会社の理解・サポーターの存在も大きいと思われるが、推しの趣味があることも大きいですねとコメントをいただきました。

○「話し合ってみましょう」

4つのグループに分かれ、①高木先生の講演、当事者の方の話しを聞いてみて思ったこと・感じたことなど、②ささえ合いの活動として、または地域で共に暮らす住民として障がいをお持ちの方にどんなことができるか話し合いを行い、当事者の方にも質問等をしていただきました。その後各グループで話し合った内容のポイントを発表しました。

グループ①



- ① 病気に対する知識、早期発見、早期治療に繋がるのだと認識した。本を見て病気に気付いたことも良かった。家族の協力は大きいのだと認識した。障がい者、健常者は分断しがちである。それを取っ払う必要があると感じた。パッと見た感じでは、3人の方が障がいをお持ちとは分からない。好きなことをされたり、働くことを続けたり活動したりという話に励まされた。勇気をもって引き続き頑張りたい。
- ② どんな風に関わりをもてば良いのか考えること自体が大切であると感じた。

グループ②



- ① 私達がしてあげるのではなく、共に生きるという視点が大事である。支える家族が居なかったり、家族も障がいがあったり、専門職と一緒に支えていく視点が大事であることがわかった。
- ② 当事者の話を聴くことが大事。地域の人に知ってもらおう。本人が良ければ小さい集まりでも良いし、支え合いをし、沢山の人を集めて聞く、知る機会を作ることが大事である。当事者は普通に接して欲しい。家族やサポートの無い方に対し、地域でどのように支えていけば良いのか考えていきたい。支えが無ければ施設に行くことになってしまう。

グループ③



- ① 3人の方の話を聞いて、障がいの認定をいつ受けたのか？働いていて給料はどれくらいなのか？通院をして薬を飲んでいるのか？ピアノはどうやって覚えるのか？などグループの中から質問が出た。当事者の方からは地域の方に知ってもらい、声をかけてもらえると助かる。当事者の方と出会ったときは、躊躇せず声をかけることが大事であると思った。
- ② このような話は、あまり聞けないので、勉強になった。3人の方と出会えて良かった。

グループ④



- ① 障がいを持った方と接する機会がなかなかないが、本日の3人話を聞いてみて素晴らしいと思った。現実（実情）を知る良い機会となった。障がいのある方と接したことがないと、正直近づきたくないという実情もあるのではないかと感じた。障がいがあっても好きな事や趣味への取り組みは一緒であると感じた。障がいへの理解を醸成していく機会を作る必要がある。
- ② 日常の中での気付き合い、親しみを育てる関係性作りが必要である。

〇講評（高木先生より）

今日ここに参加して下さった方々は、支え合い協議体の第二層の方がメインですが、もっと身近な所では第三層の方達が動き始めている地区もあります。今日お話をしてくれた三人の当事者の方達は、自分の出来る事、したい事、働く・普及啓発・ピアサポーター、どれも素敵な活動でしたね。一緒に支援者の人達とも取り組んでいます。そして、竜王地区に住んでいます。支え合いで何が出来るのかを考えていく時に気を付けなければならないのが、本人の困りごとに気づくと、すぐに「何かをしてあげなければならない」と思いがちです。すぐに「何かをしてあげなければならない人」もいるかもしれません。そこは専門職の関わる部分でもあります。今日の三人の方達も、一見して、障がいをもっていることが分かりませんが、でも障がいがあるのだなと気づく瞬間があり、今までは見て見ぬふりをしてしまい逃げていたとすると、私達は、何を見たらよいのでしょうか？まずは、関わってお話を聴く中で、「本人の生きづらさについて」共感することではないのでしょうか？話を聴いて「目の前のあなたの理解をしたい」と思うことで、関係性は深まります。住民同士が交わす日常の言葉や、相談・サポートと、専門職の方の相談支援とは一緒ではありませんが、挨拶を交わし、言葉をかけることは住民同士でも出来ることではないのでしょうか？

さて、前段で「みんな違ってみんないいに潜む畏」の話をしました。家族、血縁、社縁など元々あった縁が一度崩れると形成しづらい世の中です。今日お話をしてくれた三人の方は、自分の居場所、サポートしてくれるヒト、活用できる機関など新たに会った人たちと「新しい縁」を築いていますね。今日参加していただいた方々とうこうして当事者の方が会えたものもまた新しい縁の1つかもしれませんね。是非このような機会をたくさん行っていきたいものですね。



○情報提供

基幹相談支援センター

参加者の方にパンフレットを配布させていただき、基幹相談支援センターが敷島保健福祉センターの社会福祉協議会にあり、障がい者とその家族の総合的窓口になっている。民生委員や地域の方からも相談を受け付けている。福祉サービス、就労、不安や医療関係の相談、就学や家族関係など、幅広く相談を受けている。ひきこもりの方の相談窓口にもなっている。などの情報提供を行いました。

令和5年度 住民向け研修 アンケート集計

参加者：28名

アンケート数：26名

回収率：93%

1. 本日の研修会はいかがでしたか。

大変参考になった：13 参考になった：12 参考にならなかった：0 未回答：1

- 当事者の方に直接お話を伺えて良かった。(7)
- 皆さん前向きに生活していることを感じて私達も前向きに生きていきたいと思った。
- 今後のふれあい活動の参考になった。
- 当事者のお話を聞いて、知らなかったことや気づいていなかったことがたくさんあった。(3)
- 当事者と日常の関係を持って当事者について知り、生きづらさを解決していくことが大切ということに気が付くことが出来た。(2)
- 当事者の方だけのことでなく、私達に関わる話であってそれを意識しようと思えた。
- 色々な障がいを持っていても、皆前向きに自分で出来ることをコツコツやっていくこと。これは私達にも当てはまることで勉強になった。
- 今までの研修会より深く学ぶことが出来た。

2. ささえあいの活動で障がいをお持ちの方にどのような関わり方が出来ると思われましたか？

- 障がいをお持ちの方と会った時に出来る事をお手伝い出来ればと思った。(2)
- 障がい者と健常者との区別なく相手の気持ちに寄り添えたらと思った。(4)
- 信頼を気づくことが大事であると思った。(2)
- まずお話を聞いてから、自分に何が出来るのか地域で何が出来るのかを考えていきたい。(3)
- 今後は勇気を持って障がいをお持ちの方にお困りごとはありませんか？と聞けることが出来るそう。
- 分け隔てなく一緒に何か楽しく出来るとよい。障がいの方でも出来ることはあるという視点を持って接する。
- 近所の仲間に入ってもらえるように努力したい。
- なかなか相手の気持ちになるのは難しいと思う。
- 日常の会話から関わりを持っていきたい。(4)

3. 今後も「障がい」についての研修会を行いたいと考えています。今後の開催において、ご意見などご自由にお書きください。

- 発表者はマスクを外して話して欲しかった。せっかくの機会、聞き取れず残念だった。(2)
- とても分かりやすくて良かった。(2)
- 障がいを持ちながら働いている人達の話聞いて良かった。
- 今回の様な研修会を、年に2回くらい開催してもらいたい。
- 自分達だけで考えるのではなく、仲間と一緒に考えるのが良いと思った。
- また質問出来る機会を増やしてほしい。
- 通常の集まりの会で少しずつ時間を割いて周知して行ってほしい。
- 次回も色々な障がいの方の話聞きたい。(4)

☆アンケートへのご協力ありがとうございました。

事務局より（障がい者基幹相談支援センター）

今年度は、コロナが5類に移行し、夏に竜王地区のささえ合い会議にて研修周知をさせていただき、大勢の方に参加していただき研修を開催することが出来ました。研修参加者の皆様、講義等ご尽力いただいた県立大学高木寛之先生、発表をしていただいた宿澤さん・白濱さん・片桐さん、研修進行にご協力いただいたスタッフの皆様はこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

実際に竜王地区在住の3人の当事者の方に、各々の地域での暮らしについての発表をしていただき、その後のテーブルごとの話し合いにも巡回して参加していただきました。当事者・参加者が近い視点で、生活のことや地域のことを互いに話せる良い機会になったのではないかと思います。地域でささえ合い活動をされている方が参加してくださり、今後地域で「障がい」をどのように捉え、住民として同じ「当事者の立場」で取り組んでいくか、日常の関わり方などについても意見を出していただきました。日々の関わりの中で積極的に声をかけていきたいなどのお声もいただきました。

今回開催した地区に限らず、地域で障がい者やその家族、ひきこもり等の困りごとがありましたら、ぜひ、基幹相談支援センターにもお声かけいただけますようお願い致します。

報告書作成者

社会福祉法人 甲斐市社会福祉協議会

甲斐市障がい者基幹相談支援センター

鴨作 光昭・川窪 真凡